

開学当初のできごと

丸尾 雅啓

環境生態学科

2015年度末の時点で、環境科学部棟に開学当初から研究室を構えている教員は、筆者を含めて4名となった。調べてみると、他学部の教員を含めても十数名である。最初からのことを知っているものはすでに全教員の10%に満たないことになる。「古い話ばかり」といわれる年になる前?に記憶をたどってみたい。

開学したての環境科学部はB4、B6棟が未着工、共通講義棟との間の環濠も未着工であった。グラウンド予定地は未整備で荒地になっており、いまの「びわこ池」のあたりに工事関係者のプレハブ事務所があり、その横を通って、工事車両が建物のすぐ前まで来ていた。グラウンド予定地は雨がたくさん降ると楕円形の大きな水たまりになり、部屋の窓からカイツブリの親子が遊泳する姿が眺められた。設計者の方もプレハブで仕事をしており、工事現場そのものであった。教員は私を含め、使用者としての要望を日々様々に出しており担当者の方を困らせていたが、今考えてみれば大きな建物の一つ一つに心を配るのは大変な作業だったのだろうと思う。駐車場も北駐車場や学部棟近くのスペースがなく南駐車場のみで遠かったので、無精な私は建物の真下に乗り付けていた。夏に遅く帰ろうとして車のヘッドライトをつけると目の前に大きなアオサギの姿が浮かび上がり、夜中にアオサギとともに驚愕の声と両手を(翼を?)あげたこともあった。冬には雪止めのない環境科学部棟の屋根から大量の雪が崩落し、帰宅しようと思ったある教員が車に乗ろうとしたところ、フロントガラスが粉々になって消えていたこともあった。同じ講座の雪氷学を専門とする教員は、県立大危険マップを作成して警鐘を鳴らしていた(この点については現在も解消されていないのでご注意)。

当初は全学を合わせてもまだ教員数が少なく、学生も1年生500名ばかりであったので、とにかく一人一人の距離が短かった。先日、偶然他学部の1期生のかたと出会った際に当時の雰囲気を知ったところ、本当に何もなかったけれど、自分たちから始めるのだという気持ちが出てきてとても楽しく過ごすことができたと話してくれた。そして、他学部他学科の学生のこともよく憶えていると。学生達は本当に気軽に研究室に現れ、話をしてくれた。

初代学長の日高敏隆先生も、少し早めに声をかけておけば、教職員の個人的な集まりにまで足を運ん

でくださった。昼休みが終わったところにカフェテリアに行くと、学長はふつうに食事をとっておられ、「みんなは私が忙しくてつかまらないといっているけど、話がしたければこの時間にここにいればいいんだよ」と言われていた。また学長は自らも人間学の講義を担当され、外では本学のことをあらゆる方にアピールしてくださった。また職員の皆様もこれからどうなっていくのかわからない新設の県立大学に着任したことは同じなので、立場の違いから意見が食い違うことも多かった一面、直に相談しやすかったことも事実である。

自分はといえば実験室の立ち上げ、実験科目の内容に関する相談、新規導入した装置それぞれの立ち上げに時間をとられ、気が付いたら夕方になっていたことが多かった。締め切り前日の昼に初めて書類を見せられることもしばしばであった。相手の立場を考える余裕がないままに物事が進んでいき、正直やらなければならないことをやっているだけでどんどん時間が過ぎていった記憶がある。環境フィールドワーク(当時は1・2・3すべて必修科目)も初めての試みであり、担当する各々の教員もこれからのように実習を展開してゆくか模索していた。そもそもお互いの専門分野もよくわからず、滋賀県の風土も知らない自分が滋賀県のことを語っているのである。初めて訪れた農村集落排水処理施設に至っては、設置の経緯も知らないのに、「へえ。このような施設があるのですねえ。」と感心していたところ、いきなり同グループの教授に「では、説明してください。」と話を振られ、全然理解していないものについて学生さんたちの前で説明をすることになり、冷や汗をかいた。この時は立場上できないといえるはずもなく、以前から興味をもって読んでいた戸別浄化槽に関する本の知識を頼りに解説したが、高等学校での教育実習以来久しぶりに感じた緊張感であった。この時の学生さんにはこの場を借りてお詫び申し上げたい。これから後、毎月毎年のように野外調査を繰り返しながら少しずつ地勢を把握し、土地利用や地質、そして水処理法の多様さを知り、それでも琵琶湖集水域の概観ができてくるのには十年近くかかったように思う(いまでも未完成である)。気が付けば一期生の卒業式を迎えており、いったい四年間で何ができたのかと自問自答し、そしてこの時に感じた不甲斐なさは、忘れることができない。

本当の意味で落ち着いてきたのは正直博士前期課程が完成したころではなかっただろうか。この時期の雰囲気は、当時学部生だった尾坂兼一先生(環境生態学科卒)や、平山奈央子先生(環境計画学科卒)に訊くとよくわかると思う。逆に形が出来上がってしまうとそれに安住する部分もあり、開学時の活気というのは徐々に薄れてゆく。環境科学部という組織も開学時は全国でもわずか(長崎大:環境科学部、岡山大:環境理工学部)であったが、今や環境を含む名前を持つ学部・研究科は何十にもなり、老舗であるというだけではこの中に埋没しかねない状況である。卒業時アンケートでは、学部を問わず本学に在籍していたことについての満足度が非常に高いことを考えると、これまでに卒業した多くの環境科学部生の今後のためにも、より社会にアピールできる学部に成熟してゆくことを肝に銘じなければならない。